
色んな世界を見てみたい（仮）

ピンクの河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色んな世界を見てみたい（仮）

【Nコード】

N1988BA

【作者名】

ピンクの河童

【あらすじ】

ある日、神様と出会うことで、色々な世界を巡ることの出来る能力を手に入れた。

これは、その能力を使い色々な世界を見ていく少年？の話し。

更新は不定期です。

気まぐれに投稿していくので、それが駄目な方はバックをお願いします。

描写が足りないとか、文字の書き方が違うとか、色々駄目な部分があります。
ご了承ください。

この話はすでに、幾つかの世界を周ったというのが前提で始まります。

なので最初の始まり方が、意味が分からないと思います。

プロローグ

――突然だが、俺は神様に会った事がある。

何故会ったのかは、分からないが確かに会った。

……テンプレな展開によって、四つの能力と三つの道具を貰ったのだ。

そのうちの一つ。

「世界を渡る能力」を使い色んな漫画やゲーム等の世界に行くことにした俺。

この物語は、そんな俺が織り成す、愛と勇気の物語だ（笑）。

幾つかの世界を見た俺が、次に降り立った世界は、ハンター×ハンターの世界だった。

「……ここは何時の時代だ？」

世界を渡る能力には、あるデメリットがある。

一つ、一度この能力を使うと、二年間はこの能力を使えなくなる。

二つ、渡る世界の時代を選べない。

そう、渡る世界は選べても、時代を選ぶことができないのだ。

「ここはハンター×ハンターの世界なのは確かなんだよな」

目の前には、首を傾げてこちらを警戒している少女と、何故か少女を囲んでいる男が四人。

……まあ、見れば分かるよな。

ナンパか、無理やり連れて行こうとしているかのどちらかだ。

暫く見ていると、少女の様子に気が付いた右側にいた一人の男が、こちらに振り向き叫ぶ。

「あん？…何だよ、そこのガキ！？」

そのガラガラな声を聞いて、不快な気分になりながらも、ジッとして動かない俺。

すると、男のガラガラな声を聞いた他の三人もこちらを向く。

それでも、動かない俺。

何故動かないか？

目の前の少女を見れば分かる。

後頭部あたりで、一つに纏めている薄い紫の髪。

どこか、冷たい感じのするつり上がった目。

年の頃は、だいたい14歳ぐらいだろうか……。

だけど、見間違える筈がない。

ハンター×ハンターで、俺が一番大好きだったキャラなのだから。

ドガッ！

少女を見てフリーズしていた俺は、四人の男達の一人…俺から見ても一番手前にいたスキンヘッドの男が近づいているのに気が付かなかった。

そのせいもあり、顔面を思い切り殴られ真後ろにあったコンクリートの壁にぶつかる。

「ハッ！雑魚が……」

スキンヘッドの男が言ったその言葉に、他の三人が笑い声をあげ口々に、スキンヘッドの男を祭り上げるようなことを言う。

ぶつかった壁のところには、埃などがまっている。

side<絡まれている少女>

目の前にいきなり現れた、黒い長髪の自分より少し年が上くらいの少年。

まるで、空間移動をしたかのようにいきなり現れた。

私は周りにいる雑魚よりも、スキンヘッドの男の向こうにいる少年を警戒する。

何故か？

周りにいる雑魚は、何の力も持たない人間。

だが、新しく現れた少年は、いきなり現れたことを考えておそらく

……念能力者だろう。

それにしても何故か、オーラが見えないが絶をしているからなのか？

どんな能力なのか？

少年を見て色々な疑問が浮かぶが、今はどうしようもない。

少年は男達に、何かを言われても心ここにあらずと言わんばかりに、ボーとしている。

ドガッ！

そうこうしているうちに、少年がスキンヘッドの男に殴られ真後ろのコンクリートの壁にぶつかった。

男が近づいて来ているのに何もしない少年に、違和感を覚えたが、見守ることにする。

暫くして、埃などがまっているのがおさまり、男達が壁の方を見ると、壁が凹んでいるだけでそこに少年がいなかった。

「どこに?..」

口から小さくもれた、その言葉に返事が返ってくる。

「ん?...君の後ろにいるよ?..」

「!?!?!」

バツと後ろを振り向くと、先ほどの少年が無傷で立っていた。

念が発動した気配が無かった。

コイツは!..?

s i d e o u t

殴り飛ばされた俺は、壁にぶつかった後、「ぬらりひよんの畏れ」を発動させて、男の後ろでこちらを観察している少女の後ろへとまわった。

この世界に来る前に行った、ぬらりひよんの孫の世界で、羽衣狐を倒したぬらりひよんから、複写した。
なかなか便利な能力。

それを使った俺は、少女が発した言葉に返事をする。

「ん？…君の後ろにいるよ？」

冷静な顔をしようとしているが驚きの表情を隠しきれない為、
見ていて面白い。

「…………お前はいつ……………」

少女の言葉を遮って聞こえる四人の男達の声。

どうやって…や、無傷！？だとか似たような言葉。

「はぁ……………」

めんどくさい。

どの世界でもいる、くだらない男達に呆れてしまう。

少女に、一言つけて俺は男達に向かって歩き出す。

「めんどくせえ……」

口に出したその一言に、男達はキレて四人で俺に殴りかかってくるが、それをかわさずに向かってくる拳ごと殴り飛ばす。

「ライトニングプラズマ！」

俺がもつ必殺の一撃。

聖闘士聖矢の世界で修得した技の一つ。

その拳は、光の速さをもち対象にたいして、一度に複数回拳を叩き込む。

一般の男達がそれを、防げる筈もなく、先ほどの俺のように壁にめり込んだ。

一応手加減はしたんだけどね。

呆気なく思っても、後ろからの視線を感じて、少女の方を向く。警戒半分、興味半分っていう感じの目でこっちを見ていた。

「よっ！俺は、カイリっていうんだ！君の名前は？」

知っているけど自己紹介は大事だと思うんだ。

まあ……こうして、この世界での初めての出会いがあったのだった。

原作介入まで少し……プロローグから、六年ほど飛ばします。（前書き）

お久しぶりです。

設定を少し直しました。

原作介入まで少し……プロローグから、六年ほど飛ばします。

――あれから六年。

俺は現在、森で遭難していた。

……わけが分からないと思うだろうが、どうしようもない。

紫の髪の少女と出会ったその後結局名前を覚えてもらえなかった俺は、幻影旅団という盗賊団に追われることになった。

自分自らが言った、一言で興味をもたれてしまったのである。

少女を助けるために使った能力のことだ。

彼女は、それを念能力と思っていた。

……まあ……当たり前のこと。

なのに俺は、言ってしまった「マチさん！……俺に念を教えてください！……」と。

やってしまった。

二つの意味でやってしまった。

能力を使う上で気をつけてないと駄目だった、能力の隠蔽。

そして、何より少女の名前を呼んでしまったという初歩的なミス。

かなり興奮していたために、出てしまったんだよ。

……自分の好きなキャラなんだもの。

どうやっても、取り繕うことが出来なくなった俺は逃げたんだよ。
後ろを振り返らずにね。

それからだ。

幻影旅団が俺を追うようになったのは。

おそらく、マチがクロロに言ったんだろう「念とは違う不思議な能力を使う男がいた」と。

……そんなこんなで、追われる毎日をおくっていた俺が、たどり着いたのは、見渡す限りすべて緑な場所だった。

入り口に、立ち入り禁止と書いてある看板が見えたような気がしたが、走るのに必死になっていたために気にしないことにする。

そうして、だんだんと奥に、奥にと進んでいくと、一つの洞窟を見つけた。

そこで暫く過ごすことにする。

と、まあこんな感じで、今いる広大な森？から出られなくなってしまったんだ。

気がつかずに奥に行きすぎたのが原因だろう。

それに、入り口にあった看板。

あれは間違いなく立ち入り禁止の看板だな、と思う。
この森には、見るからに危ない動植物を筆頭に気味が悪いものがたくさんある。

……ハンター試験に間に合うのか？

一抹の不安をかかえて、今日も神様から貰った魔法球の中で調達した食料を調理する。

貰っておいて良かった。

この魔法球、通称別荘の中には漫画トリコの世界が広がっている。さすがに、人は生息していないが動植物がいるため、食料調達用として重宝している物。

それとセットで貰った、調理道具セットを使い、料理を作ること十分。

焚き火にかけた、鍋が煮えてきた。

グツグツと鍋から音が聞こえ、美味しそうな匂いが鼻に届く。

そろそろ食べ頃。

そう思ったその時、後ろの木の影に人の気配を感じた。

攻撃的な気配ではなく、何かを求めているような気配。

修行の成果の一つである気配察知能力のおかげで、半径五百メートルくらいなら察知することが出来る。

木の影から、出てくる気配のない生き物に俺は、口を開いた。

「その木の影にいるやつ……出てこい」

その生き物に攻撃的な意志がない為、静かに優しく言う。

そして、木の影から出てきた一人の女性を見て、驚くことになった。

side<????>

私は、依頼である禁止区域にいた。

何でも、数年前にこの森に入った少年がいたらしい。

森の入り口の近くの村人が依頼をしてきたのだ。

少年のおかげで、食料不足が解消されたとか……。

心配になった村人達が、お金を集めてハンター協会に頼んできた依頼。

本当は、美食ハンターである私の仕事ではないけれど、食料不足を解消したと聞いて興味をもった。

一人の美食ハンターとして、食事に関することには、敏感になっているからだろうな。

――森に入って、一週間たった。

奥に入れば入るほど、食べられる物が無くなってきて、今ではもう三日間何も食べていない。

……その少年って何処にいんの？

そう思ったその時。

私の鼻に届く、美味しそうな匂い。

グーと鳴るお腹。

口からもれた唾液。

三日ぶりに嗅ぐ食べ物匂いが私の頭を支配する。

「……この匂いは……」

ゴクリと唾をのみ、匂いがする方へと足を進めていく。

ガサガサと草を掻き分け、歩いているうちに、少しひらけた場所が見えた。

その中心で焚き火を焚いて、その上に鍋がある。

グツグツと音が聞こえると私は我慢の限界を越えた。

「そこの木の影にいるやつ……出てこい」

今にも飛び出そうとしていた自分を止めたのは、視界に入っていない

かった一人の男。

年の頃は、だいたい二十歳くらいだろうか？

黒い長髪に黒い眼をした男。

その男の言葉だった。

その声を聞いた私は、男が敵意をもっていないのを声から察して、今いる木の影から出ていった。

s i d e o u t

木の影から出てきた一人女性。

その人は、特徴的な髪のみとめかたをしている。

頭のみとめかたで、まとめている髪とは別に顔は整っていて、出る場所は出ている。

もう一度言うが、髪を普通にすれば、物凄い美人な人。

原作のハンター試験に出てきた試験官メンチだった。

顔を見てみると、どこか痩せた印象をうける。

どうして、こんな森の奥に？

疑問が浮かぶが、彼女のお腹の音が聞こえたため、話しは後にしてまずは食事にしようか。

「……まずは、話しの前に腹ごしらえをしようか？」

彼女は、ただ頷くしかなかったが、俺が焚き火を挟んで反対側に座るように言うと、それに従って座る。

お腹が鳴ったのが、少し恥ずかしかったのか、黙って俺が差し出す器をとって食べ始める。

……警戒しないのか？

そう思うが、顔を見れば暫く何も食べていないのが分かるため何も言わずに、自分の分を食べる。

因みに今日の献立は、黒狼鳥で作った鍋だ（……何故か、魔法球の中にいた。見た目は、モンハンのヤンガルガだ）。

食べられるのか分からなかったが、食べてみれば美味しかったため、色んな調理方法を考えた結果、鍋が一番だった。

骨や内臓で数日かけて作っただし汁に、引き締まって歯ごたえがある肉を数種類の野菜と煮た物だ（だし汁を作る為に、数日間灰汁取りを続けた）。

ガツガツと箸で口に放り込んでいくメンチを見て、嬉しくなった俺は、締め雑炊の準備に取りかかる。

そんなことなど、お構い無しに食べ続けるメンチ。

やっぱり誰かに食べてもらえるのはいいなと思った日だった。

「うーまーいーぞー!」

そんな声を聞きながら……………。

俺は、出来た雑炊を渡すのであった。

原作介入まで少し……プロローグから、六年ほど飛ばします。（後書き）

何か色々とおかしい。

そう思うけれど、とりあえず投稿しました。

これから先、独自解釈や、本来はあり得ないものが出てくると思います。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

使える魔法等は、別に投稿します。

主人公設定

主人公 カイリ（花形 海里）

年齢 16 ↓ 22（肉体年齢）

身長 175 ↓ 180

体重 66

容赦 髪は黒い長髪。

目は若干つり上がり気味で色は黒い。

顔は普通よりちょい上。

性格 一度決めると、それを貫き通す性格。

女子供には優しい。

能力 「世界を渡る能力（文字通りの能力。ただし一度使うと二年間は使えなくなったり、渡る時代を選択出来ないなどのデメリットがある。…… この話では他の、SSと違い平行世界等を普通の違う世界と表しています）」

「右手で触れた対象の力や能力を複写して自身に付加する能力（これまた文字通りの能力。ただし一つの世界で一つまでしか複写出来ない。…… その能力や力のデメリットまで複写する。魔力保有量等も力と表しています）」

「不老不死（老いや、死の概念がない。この力を持つ者が人と交わると、その人も不老不死になってしまう。）」

「肉体操作（自身の肉体の年齢や、形等を操作する能力でデメリツトは無い。）」

貰った道具 「魔法球（魔法先生ネギま！に出てくる物。中にはトリコの世界が、広がっているが人は生息していない。完全に食料調達用。）」

「調理道具セット（そのまんま。）」

「???」

以上が貰った能力や道具。

この世界までに追加した能力←

「ぬらりひよんの孫の世界で、ぬらりひよんの畏」

「ゼロの使い魔の世界で、モブから風のスクエアクラスの才能（魔法は修得済み。）」

「聖闘士聖矢の世界で、ゴールド聖闘士から、その才能（幾つかの

技を修得した。」

以上。

主人公設定（後書き）

暫くはこれでいきます（この設定には、複写したものしか載せてません）

主人公設定（現在使える魔法と技）（前書き）

主人公が現時点で使える魔法と技。

……たぶん解釈が違うと思います。

主人公設定（現在使える魔法と技）

ゼロの使い魔

- ・使える風の魔法は、某烈風さんを思い出してください。
- ・土の魔法を数種類（鍊金や固定化をメインに使います。主人公が元々もっていた資質）
- ・上記二つを用いた精霊魔法（風と土の精霊と契約をした為に使えるようになった）

ぬらりひよんの孫

- ・ぬらりひよんの畏（主人公はただ周りから認識されなくなるだけだと思っている。原作を殆ど見ていないため）

聖闘士聖矢

- ・ライトニングプラズマ（光速の拳を複数回叩き込む技。ボルトより攻撃力は落ちる）
- ・ライトニングボルト（光速の拳で強力な一撃を叩き込む技。溶けない冰山を砕く威力をもつ技）
- ・エクスカリバー（自らの手刀により対象を一刀両断する技）

・ダイヤモンドダスト（己のコスモ……気を冷氣にして対象に叩き込む技。本来の解釈とは違うはず）

因みに、魔力はスクエアクラスの魔法を20回使えるくらい。

気は、ライティングボルトを15回打てるくらい。

……最強になるか疑問。

主人公設定（現在使える魔法と技）（後書き）

こんなので、蟻の王様に勝てるのか？

と思う設定になってます（今現在は）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1988ba/>

色んな世界を見てみたい（仮）

2012年1月13日01時45分発行